

承継 Project

『承継』：これは、個々の会員間でも組織自体に於いても、注目されているキーワードである。

皆さんは『継承』と『承継』の違いをご存知でしょうか？同じ意味合いで使われる事が多いが、厳密には少しニュアンスが違うようだ。『継承』とは継ぐのを承ると書いて、先の人の身分・権利・義務・財産などを受け継ぐこと。『承継』とは承って継ぐと書き、先の人の地位・事業・精神などを受け継ぐこと。前者は「手を加えずにそのまま事業を引き継ぐ」というニュアンスで、後者は「根底にある大切な理念や精神だけは曲げずに引き継ぐ」というニュアンスである。

今期からスタートした、この『承継プロジェクト』。どんな『承継』にも、それぞれ違ったドラマがあり、それを紹介していく企画である。

第29代では、SPC有史以来初となる二世会員の岸上こうじ氏が理事長を務め、『SPC REVOLUTION』というテーマを掲げた。また今年度は、初の試みとして九州の地で『秋季全国大会』と『全日本理美容選手権大

会』が開催される予定であるが、今期九州統括本部の会長に就任した大久保潤氏もまた、二世会員の会長である。

大久保家の歴史

大久保早苗さんは10人兄妹で生まれ、家が貧しく学校にもいけず、早くから美容室に住み込みで働いていた。『30歳になったら自分の店を持つ』というのが夢で、出店を支えてくれたのが結婚した旦那様であったという。

結婚して一女と一男に恵まれ、念願の自分の店も持てた早苗さんであったが、旦那様は「呑む・賣う・打つ」の男性で、義父母は体も悪く、仕事と家庭の両方を守る毎日は、なかなかハードなものであった。しかし、

「先祖代々の土地を売ってまでして店を作ってくれた旦那様と義父母には感謝しかない」と、早苗さんは言う。

店は娘に継がせたいと考えていたが、長女はあっさり『美容師にはなら

ない』と言ったという。そんなやり取りを見ていた息子の潤さんは、『俺が美容師になるよ！』と言ったそうだ。しかし、子供の頃からガタイも良く、スポーツ少年でオシャレとは縁遠い息子に、美容師という職が合っているとは到底思えない早苗さんであった。

本人が言うならば……と、潤さんを美容学校に通わせ、メーカーさんの紹介で福岡のサロンに修行にやった。そして技術者として力を付けた頃、実家の店に戻り、店長に就任したのである。

その頃、店の経理や事務関係は長女に全て任せており、家族経営ながらにお金の事はきつりと姉に仕切られながら、親子は円満に営業をしていたそうだ。

SPCとの逢い

潤さんが店長として店に戻って来て間もなくの頃、早苗さんが着付けを教わっていた方が熊本会員の方で、SPCを紹介された。早苗さんは潤さんにもすぐにSPCに入会させ、青年部に在籍させたのである。

当時の潤さんにとって、SPCは大変煩わしく、不可解な存在であった。

会議、会議と熱血漢な人ばかりで、夜通し酒を呑み、営業中で忙しくてもしょっちゅう電話が掛かってくる。たまの休みも呼び出され、また酒、酒酒。『正直、キ〇ガイ集団だと思っただけだね笑』と潤さんは言う。

息子がSPCにイヤイヤ付き合っていて感じるも察していた早苗さんであったが、『きっとどこに何かある！』と直感していた。

そして、今言えは豪華な面々が、岸上こうじ氏、横山かやき氏、横田剛一氏のお三方に1週間預かって貰うという『東京豪華ツアー』に、10万円のお小遣いを持たせて息子を送り出した事もあったそうだ。



有限会社シェイクセブン

熊本県宇土市新松原町40-1
TEL 0964-22-7822
代表取締役社長 大久保潤
取締役会長 大久保早苗

親の文句言う前に、オムツ脱ぎなさい！

独立を支えたSPC

早苗さんの育児法の基本は、『自由』。これまで、何をしてもダメとは言わずに育てて来た。唯一許さなかった事といえば、事故を起こしたら危ないという理由でバイクだけだったそうだ。

そして『30歳までは何をしても良い。でも、30歳になったら自分の店を持って独立するか、結婚をする事』と昔から潤さんに言い聞かせていた。その言葉通り、潤さんは30歳の時に店を作って独立する事に決めたのである。

いざ独立するにあたり、これまで厄介だと感じていたSPCの先輩方が、続々と潤さんをバックアップし出した。物件選びから、家賃交渉、銀行取引の仕方や求人の方まで、それぞれその分野において親身にアドバイスしてくれたのである。

自分の為に時間を割き、親身に、そしてパワフルに指導してくれる先輩方を見て、潤さんは改めて『SPCって何なんだろう！凄いな！』と圧巻されたという。

先輩方の手助けを最大限に活かす事がで

き、彼の店は大成した。その出来事から、潤さんのSPCに対する考え方や想いは、がらりと変わったそうだ。

承継のカタチ

「うちの場合は、親が築いた会社を子が継ぐのとは少し違いますね。」

しみじみと語る潤さん。独立するタイミングでSPCの先輩方に様々な事を相談しているうちに、心に響くアドバイスがあったという。

当時、まだまだ現場に入っていた頃、『自分が40代や50代になった時、格好良い美容師でいられるだろうか？そんな将来の不安を感じるようになっていた。そんな気持ちの吐露に、とある先輩が

「美容を生業ではなく、事業として捉えなさい」という言葉をかけてくれたのである。その言葉をきっかけに、自店を法人化し、母の店も吸収し、母を会長として迎え入れ、会社を作ったのだそうだ。

「様々な事を決めるたびに、親には『相談』で

はなく『報告』をする事にしています。親は信頼の於けるSPC組織の仲間たちに息子を託しているわけですから、先輩からの助言を聞いて子供が自ら考えた結論に対して、親は口を挟まない。これが良好な関係を築いているミソなのではないでしょうか」

潤さんのこの言葉を聞いて、早苗さんも笑顔で頷く。

「良かった、良かった。してみなわからん！どんな時でも、報告に対してこの母の心と言が潤さんの背中を押してきた。」

「ただ一人で決断するのは、母に賛同して貰って背中を押して貰えるのでは、何をすにも100倍安心感が違うと思うんです。子供にとっては一番の強力なバックアップというか……」

承継には様々なカタチがあると思うが、彼らの承継にはSPCとの出逢いが必要不可欠であったと言えよう。

二世の在り方

潤さんとはあるエピソードと共に、同じく二世で承継がスムーズについていない仲間

達に、こんなエールを送った。

「現在、自社では全部で6店舗展開していますが、自分の店としての1店舗目の出店時に親が保証人でした。その後の出店でも、当然のように銀行は親を保証人してくれと言ってきた。でも、親が保証人だったら親のもの『みたいなのじゃないですか。だから、つっぱねた。何で70歳の親の保証が必要なんだ！』と。だったら借りねえ！』とまで言った。そしたら貸してくれた。保証人を親にするなんて、まだまだ半人前じゃないですか。ここぞという時は、意地を張らないと！その分、誠実に商売をしなければいけないです。親が保証人と言う事は、親の借金も同然。だからそこに親も口を出すんです。それなのに、親と揉めて、親の愚痴を言っている奴は、『この鼻汁が何を言っているんだ！』っていう話です。自分の借金を自分で負えないくせに、何を生意気な事を言っているんだ！と。オムツを履いている二世が多いんじゃないかな？親の文句を言う前に、親から履かせて貰ったオムツを脱ぎなさい！ってね！」

母想いで優しい印象の潤さんだが、ここは九州男児。その生き様には一本筋の通った格好良さがある。また、二世に託す親側について、大久保親子はこう語った。

「ほとんどの経営者達は、自分が体験した事を子供に押し付けたいわけですよ。だから口出しをしないで。子供は挑戦してみたい事があるのに、親がこじやなければダメ！と言ってしまうんですよ。一番良いのはSPCを信じて、親は口にチャックを閉めて仲間

に託す！これです！」
このように、二人は息ピッタリで承継の在り方を熱く語ってくれた。

魔法の言葉

最後に、大久保親子の心温まるエピソードと、親子の絆がそのまま承継に活きる魔法の言葉を教えて貰った。

早苗さんは、『夢はきつと叶う』という講演を各所でされているそうだ。中でも、60歳になる時には、『赤いちゃんちゃんこはいらない！私は真っ赤なスポーツカーがいい！！』とたくさんの仲間達に公言していたそうだ。そして毎日神棚に貯金をしていたが、太った腹な性格の為、SPCの仲間が訪ねてくる度に『ごちそうしてたりして、なかなか目標額が貯まらないまま遠慮を迎えた。そこで、潤さんは母に真っ赤なボルシエをプレゼントしようと考えた。』

「当時はまだ2店舗経営で、月商も600万円だったんですが、税理士さんと呼んで、いけるか相談したりして……」

「もう買って買って9年も経ったのね。」
取材には真っ赤なボルシエで煨えと駆け付けてくれた早苗さん。その大切な宝物は、ピカピカに磨き上げられていた。そして、ボルシエの次に息子におねだりしたのは新築の家。現在、建設中だという。

「お母さん、生んでくれてありがとう！」
「生まれてくれて、ありがとう！」

こんな言葉を、お互いの顔を見合わせて言い合える親子である。

「この言葉を言い合える親子って、あまり居ないんじゃないですか？恥ずかしいし、照れ臭いしで。でも、これが言い合えるようになる、親子の関係も一歩進むんじゃないでしょうか。事業承継に悩みを持つ親や子には、響くと思う。これがハードルだ」と

親子同士がお互いを認めて、感謝し合う。簡単な事のように、実は難しい事なのかもしれない。そんなもの……と思われた方は、是非一度お試しあれ。



「生んでくれて、ありがとう」
「生まれてくれて、ありがとう」